二葉花金集
第二十二

鏡花全集　巻二十二　第二十二回配本（全二十九巻）

定價二千二百圓

昭和十五年十一月二十日　第一刷發行
昭和五十年八月六日　第二刷發行

著者　泉鏡太郎
發行者　岩波雄二郎
發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店
電話（03）265-4111

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉名月 1975

目次

妖魔の辻占（大正十一年一月）……一
楓と白鳩（大正十一年七月）……三九
十三娘（大正十一年十月）……五七
みさごの鮨（大正十二年一月）……七三
鵜狩（大正十二年一月）……一二七
磯あそび（大正十二年三月）……一五三
朝湯（大正十二年六月）……一七三
女波（大正十二年七月）……二七三

雨ばけ（大正十二年十一月）……二八三
傘（大正十三年一月）……二九一
駒の話（大正十三年一月）……三一五
小春の狐（大正十三年一月）……三三七
胡桃（大正十三年二月）……三七一
火のいたづら（大正十三年四月）……三八一
假宅話（大正十三年四月）……四一五
きん稲（大正十三年四月）……四三五
眉かくしの靈（大正十三年五月）……四四五
夫人利生記（大正十三年七月）……四九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

光　籃（大正十三年九月）……五三七
露　萩（大正十三年十月）……五四三
甲乙きのえきのと（大正十四年一月）……五七九
道陸神の戯（大正十四年一月）……六二三
鎧（大正十四年二月）……六五一
怨霊借用（大正十四年三月）……六六九
本妻和讃（大正十四年三月）……七二一

妖魔の辻占

一

傳へ聞く……文政初年の事である。將軍家の榮燿其極に達して、武家の代は、將に一轉機を劃せんとした時期だと言ふ。

京都に於て、當時第一の名門であつた、比野大納言資治卿(假)の御館の内に、一日偶と人妖に齊しい奇怪なる事が起つた。

其の年、霜月十日は、豫て深く思召し立つ事があつて、大納言卿、私ならぬ祈願のため、御館の密室に籠つて、護摩の法を修せられた、其の結願の日であつた。冬の日は分けて短いが、まだ雪洞の入らない、日暮方と云ふのに、滯りなく式が果てた。多日の精進潔齋である。世話に云ふ精進落で、其邊は人情に變りはない。久しぶりにて御休息のため、お奥に於て、厚き心構の夕餉の支度が出來た。

其處で、御簾中が、奥へ御入りある資治卿を迎へのため、南御殿の入口までお立出に成る。御前を間三間ばかりを隔つて其の御先拂として、袿、紅の袴で、裾を長く曳いて、靜々と唯一人、折

から菊、朱葉の長廊下を渡つて來たのは藤の局であつた。

此の局は、聞えた美女で、年紀が丁ど三十三、比野の御簾中と同年であつた。半月ばかり、身にいたはりがあつて、勤を引いて引籠つて居たのが、此の日修法ほどき、滿願の御二方の心祝の座に列するため、久しぶりで髪容を整へたのである。疊廊下に影がさして、艶麗に、然も軟々と、姿は黒髪とともに撓つて見える。

背後に……たとへば白菊と稱ふる御廚子の裡から、天女の拔出でたありさまなのは、貴に氣高い御簾中である。

作者は、委しく知らないが、此は事實ださうである。他に女の童の影もない。比野卿の御館の裡に、此の時卿を迎ふるのは、唯此の方たちのみであつた。

また、修法の間から、脇廊下を此方へ參らるゝ資治卿の方は、佩刀を持つ扈從もなしに、唯一人なのである。御家風か質素か知らない。此の頃の恁うした場合の、江戸の將軍家——までもない、諸侯の大奥と表の容體に比較して見るが可い。

で、藤の局の手で、隔てのお襖をスッと開ける。……其處で、卿と御簾中が、一所にお奥へと云ふ寸法であつた。

傍とも云ふまい。片あかりして、冷く薄暗い、其の襖際から、氷のやうな拔刀を提げて、ぬつ

と出た、身の丈抜群な男がある。唯、間二三尺隔てたばかりで、ハタと藤の局と面を合せた。

局が、其の時、はつと袖屏風して、間を遮ると齊しく、御簾中の姿は、すつと背後向に成つた——丈なす黒髪が、緋の裳に搖いだが、幽に、雪よりも白き御横顔の氣高さが、振向かれたと思ふと、月影に虹の影の薄れ行く趣に、廊下を衝と引返さる。

「一まづ。」

と、局が聲を掛けて、腰をなよやかに、片手を膝に垂れた時、早や其の襖際に氣勢した資治卿の跫音の遠ざかるのが、靜に聞えて、もとの脇廊下の其方に、嚴な衣冠束帶の姿が——其の頃の御館の狀も偲ばれる——襖の羽目から、黄菊の薫ともろともに漏れ透いた。

藤の局は騷がなかつた。

「誰ぢや、何ものぢや。」

「うゝ。」

と呻くやうに言つて、ぶる〳〵と、ひきつるが如く首を掉る。渠は、四十ばかりの武士で、黑の紋着、袴、足袋跣で居た。鬢亂れ、髻はじけ、薄痘痕の顏色が眞蒼で、兩眼が血走つて赤い。酒氣は帶びない。宛如、狂人、亂心のものと覺えたが、いまの氣高い姿にも、慌てゝあとへ退かうとしないで、ひよろりとしながら前へ出る時、垂々と血の滴るばかり拔刀の冴が、脈を打つて

ぎらりとして、腕はだらりと垂れつつも、切尖が、じり〳〵と上へ反つた。

局は、猶豫はず、肩をすれ違ふばかり、ひた〳〵と寄添つて、

「其方……此方へ。」

ひそみもやらぬ黛を、きよろりと視ながら、亂髪拔刀の武士も向きかはつた。

其をば少しづゝ、出口へ誘ふやうに、局は靜々と紅の袴を廊下に引く。

勿論、兒器は離さない。上の空の足が躍つて、ともすれば局の袴に躓かうとする狀は、燃立つ躑躅の花の裡に、鵙が狂ふやうである。

「關東の武家のやうに見受けますが、何うなさつた。——此處は、まことに恐多い御場所。……いはれなう、其方たちの來る處ではないほどに、よう氣を鎭めて、心を落着けて、可いかえ。咎も被せまい、罪にもせまい。妾が心で見免さうから、可いかえ、柔順しく御殿を出や。あれを左へ突當つて、ずッと右へ廻つてお庭に出や。お裏門の錠はまだ下りては居ぬ。可いかえ。」

「うゝ。」

「分つたな。」

「うーむ。」

雖然、局が立停ると、刀とともに奥の方へ突返らうとしたから、其處で、袿の袖を掛けて、曲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ものの手を取つた。それが刀を持たぬ方の手なのである。荒き風に當るまい、手弱女の上薦の此の振舞は讃歎に値する。

さて手を取つて、其のまゝなやし〳〵、お表出入口の方へ、廊下の正面を右に取つて、一曲り曲つて出ると、杉戸が開いて居て、疊の眞中に火桶がある。

其處には、踏んで下りる程の段はないが、一段低く成つて居た。ために下りるのに、逆上した曲ものの手を取つた局は、渠を抱くばかりにしたのである。抱くばかりにしたのだが、餘所目には手負へる鷲に、丹頂の鶴が搔摑まれたとも何ともたとふべき風情ではなかつた。

折惡く一人の宿直士、番士の影も見えぬ。警護の有餘つた御館ではない、分けて黄昏の、それぞれに立違つたものと見える。欄間から、薄もみぢを照す日影が映して、大な番火桶には、火も消えかゝつて、灰ばかり霜を結んで侘しかつた。

局が、自分先づ座に直つて、

「とにかく、落着いて下に居や。」

曲ものは、仁王立に成つて、じろ〳〵と瞰下した。しかし足許はふら〳〵して居る。

「寒いな、さ、手をかざしや。」

と、美しく艶なお局が、白く嫋かな手で、炭びつを取つて引寄せた。

「うゝ、うゝ。」

とばかりだが、それでも、どつかと其處に坐つた。

「其方は煙草を持たぬかえ。」

すると、此の亂心ものは、慌しさうに、懐中を開け、袂を探した。それでも鞘へは納めないで、大刀を、ズバツと疊に突刺したのである。

兇器が手を離るゝのを視て、局は渠が煙草入を探す隙に、そと身を起して、飜然と一段、天井の雲に紛るゝ如く、廊下に袴の裾が捌けたと思ふと、武士は武しや振りつくやうに追縋つた。

「ほ、ほ、ほ。」

と、局は、もの優しく微笑んで、また先の如く手を取つて、今度は横斜違に、ほの暗い板敷を少時渡ると、燈ともみぢの緋の映る、脇廊下の端へ出た。

言ふまでもなく、今は疾くに、資治卿は影も見えない。

もみぢが、ちら〳〵とこぼれて、チチチチと小鳥が鳴く。

「千鳥、千鳥。……」

と萬たく口誦みながら、半ば渡ると、白木の階のある處。

「千鳥、千鳥、あれ〳〵……」

と且つ指し、且つ恍惚と聞きすます體にして、
「千鳥や、千鳥や。」
と、やゝ聲を高うした。
向う前栽の小縁の端へ、千鳥と云ふ、其の腰元の、濃い紫の姿がちらりと見えると、もみぢの中をくる〳〵と、鞠が亂れて飛んで行く。
恰も友呼ぶ千鳥の如く、お庭へ、ぱら〳〵と人影が黒く散つた。
其時、お局が、階下へ導いて下り狀に、兩手で緊と、曲ものの刀持つ方の手を壓へたのである。
「うゝ、うゝむ。」
「あゝ、御番の衆、見苦しい、お目觸りに、成ります。……括るなら、其の刀を。——何事も情が卿樣の思召。……亂心ものゆゑ穩便に、許して、見免して遣つてたも。」
牛蒡たばねに、引括つた兩刀を背中に背負はせた、御番の衆は立ちかゝつて、左右から、曲者の手を引張つて遠ざかつた。
吻と呼吸して、面の美しさも凄いまで蒼白く成りつつ、階に、紅の袴をついた、お局の手を、振袖で抱いて、お腰元の千鳥は、震へながら泣いて居る。いまの危さを思ふにつけ、安心の涙である。

下々の口から漏れて、忽ち京中洛中は是沙汰だが――亂心ものは行方が知れない。

二

「やあ、小法師。……」

こゝで讀者に、眞夜中の箱根の山を想像して頂きたい。同時に、もみぢと、霧と、霜と、あの蘆の湖と、大空の星とを思ひ浮べて頂きたい。

繰返して言ふが、文政初年霜月十日の深夜なる、箱根の奥の蘆の湖の渚である。

霧は濃くかゝつたが、關所は然まで遠くない。峠も三島寄の渚に、憚らず、ばちゃ〳〵と水音を立てるものがある。さみしさも靜けさも、霜に星のきらめくのが、かち〳〵と鳴りさうなのであるから、不斷の瀧よりは、此の音が高く響く。

鷺、獺、猿の類が、魚を漁るなどとは言ふまい。……時と言ひ、場所と言ひ、怪しからず凄じいことは、さながら狼が出て龍宮の美女たちを追廻すやうである。

が、耳も牙もない、毛坊主の圓頂を、水へ逆に眞俯向けに成つて、麻の法衣のもろ膚脱いだ兩手兩脇へ、ざぶ〳〵と水を掛ける。――恁る霜夜に、搔亂す水は、氷の上を稲妻が走るかと疑はれる。

あはれ、殊勝な法師や、捨身の水行を修すると思へば、蘆の折伏す枯草の中に籠を一個差置いた。が、鯉を遁した畚でもなく、草を刈る代でもない。屑屋が荷ふ大形な鐵砲笊に、剩へ竹のひろひ箸をスクと立てたまゝなのであつた。

「やあ、小法師、小法師。」

もの幻の霧の中に、あけの明星の光明が、嶮山の髓に浸透つて、横に一幅水が光り、縦に一筋、紫に凝りつつ眞紅に燃ゆる、もみぢに添ひたる、三抱餘り見上げるやうな杉の大木の、梢近い葉の中から、梟の叫ぶやうな異様なる聲が響くと、

「羽黑の小法師ではないか。——小法師。」

と言ふ〳〵、枝葉にざわ〳〵と風を立てて、然も、音もなく蘆の中に下立つたのは、霧よりも濃い大山伏の形相である。金剛杖を丁と脇挾んだ、片手に、帶の結目をみしと取つて、黑紋着、袴の武士を俯向けに引提げた。

武士は、紐で引からげて胸へ結んで、大小を背中に背負はされて居る。卑俗な譬だけれど、小兒が何とかすると町内を三遍廻らせられると言つた形で、此が大納言の御館を騷がした狂人であるのは言ふまでもなからう。

「おう、」

と小法師の擡げた顏の、鼻は鉤形に尖つて、色は鳶に齊しい。青黑く、滑々とした背膚の濡色に、星の影のチラ〳〵と映す狀は、大鯰が藻の花を刺靑したやうである。

「これは、秋葉山の御行者。」

と言ひながら、水しぶきを立てて、身體を犬ぶるひに振つた。

「御身は京都の返りだな。」

「然れば、虛空を通り掛りぢや。——御坊によう似たものが、不思議な振舞をするに依つて、大杉に足を踏留めて、葉越に試みに聲を掛けたが、疑ひもない御坊と視て、拙道、膽を冷したぞ。はて、時ならぬ、何のための水惡戲ぢや。惡戲は仔細ないが、羽ぶしの怪我で、湖に墜ちて、溺れたのではないかと思うた。」

「はゝ。」

と事もなげに笑つて、

「いや、些と身に汚れがあつて、不精に、猫の面洗ひと遣つた。チヨイ〳〵とな。はゝゝ、明朝は天氣だ。まあ休め。」

と法衣の袖を通して言ふ。……吐く呼吸の、ふか〳〵と灰色なのが、人間のやうには消えないで、兩個とも、其のまゝからまつて、ぱつと飛んで、湖の面に、名の知れぬ鳥が亂れ立つ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook